

文字学習入門期に先習する書字スタイルに関する 文献的考察

—イギリスの在り方を中心に—

信州大学 小林 比出代

1. はじめに

—問題の所在と本研究の意義—

本論考は、イギリス（イングランド）の文字学習入門期に先習する書字スタイルに関して、「Literacy Hour（リテラシー・アワー）」を概括しつつ、一方で、日本、アメリカ、フランスの在り方を併せ考えながら、文献に拠って考察するものである。

Diane Montgomery (2007). *Spelling, Handwriting and Dyslexia : overcoming barriers to learning*. London, New York: Routledge. (書名『スペリング(綴り)とハンドライティング (Handwriting) とディスレクシア (失読症 難読症)—学習に対する障壁の克服 (学習障壁の克服)—』(筆者訳) . 以降副題は略記) は、小学校や中学校、高等学校で、教師や教育実習生が児童生徒の識字力を育成するためには Spelling と Handwriting の学習が役立つことへの理解を促し、さらには、学習する際の障壁になっているものをどのようにして克服するか指南した文献（未邦訳）である。著者の Diane Montgomery は、イギリスの Middlesex 大学名誉教授であり、学長も務めた（当該文献表紙裏より（筆者訳））。同書には、イギリスにおいて、文字学習入門期に先習する書字スタイルは、Printed writing (Manuscript writing) (活字体) ではなく、Cursive writing¹ (筆記体) であるとの現状が著されている。また、これはイギリスのみならず、「大多数の国で行われている」との実状について示されている。

一方、この記述には、現行のナショナルカリキュラム (National Curriculum (NC) : 日本の学習指導要領に相当) に記される内容や、ナショナルカリキュラムに準拠し、実際にイギリスで使用されている Handwriting のテキストの内容とのずれが生じている。

本論考では、イギリスでの Cursive writing 先習を推奨する考え方には、日本の小学校学習指導要領が示す高学年の学習「点画のつながり」は低学年から行うべきではないかという重要な問題提起が内在するとの推論を含め、日本における行書学習の在り方を検討する際の示唆を内包するといった仮説のもと、その具体的内容を明らかにするための嚆矢的な考察を試みる。

2. 日本・アメリカ・イギリスでの 文字学習入門期に先習する 書字スタイルに関する変遷と実状

はじめに、本論考の前提として、日本、アメリカ、イギリスそれぞれの、文字学習入門期に先習する書字スタイルに関する変遷と実状について、小林 (2019)² に基づき再掲する。

日本の場合、明治期からの動向に注視すると、「小学校教則大綱」(1891 (明治 24) 年) から「小学校令施行規則中改正」(1908 (明治 41) 年) にわたって楷書の位置付けが徐々に前面へと押し出された。この時期は、「教科書の国定制に伴い、『国語科』以外の全ての教科書で活字 (楷書) が用いられるようになった」「当時の行政用の書体として楷書が定着していった」「印刷術の発達によって活字 (楷書) が普及していった」というように一般社会での楷書への関わり方が大きく変化しつつあった。こうした動向は、書写指導における楷書の位置付けの変遷に大きな影響を与えた。国定教科書では、「小学校令施行規則」(1900 (明治 33) 年) 及び「小学校令施行規則中改正」の方針を受けて、楷書 → 行書 → 行草へと段階を踏んだ教材を掲げている。このように、教科書の上では、第一期国定教科書以来現代まで一貫して楷書を導入期に用いた段階的な指導が進められている。³

Cursive writing が慣習的な書字スタイルとして社会に定着していた 20 世紀アメリカの場合、1910 年代まで初等教育段階の書字教育では Cursive writing のみ指導していたが、1921 年イギリスからの Manuscript writing 導入後長期の経過を経て、現在は Manuscript writing と Cursive writing 2 つの書字スタイルを指導している。その際、低学年で Manuscript writing、中学年で Cursive writing の指導が一般的とされる。⁴

イギリスの場合、現在の教育改革の根底を規定した「1988 年教育改革法」によって導入されたナショナルカリキュラムに示される Key Stage 1 (5～7 歳) での Handwriting の教育目標には「joined (連続している)」が挙げられている⁵ が、当該の Key Stage における「Attainment Target (到達目標)」では、「連

続していて (joined) 読みやすい (legible)」を Key Stage 1 の最終レベルに掲げており⁶、小学校入学時に Cursive writing が書けるようになることは求めている。続いて、現行のナショナルカリキュラムでは、Key Stage 1 の第 2 学年での「法的に規定されている Handwriting の学習内容」に「続け書きに必要な斜めや水平な線を使い始め、どの文字を連続させるかささせないかを理解する。」を掲げ、「法的要件ではない Handwriting の学習内容」として「(Printed writing を) 確実に正確な字形で書けるようになったら、連続した書き方 (続け書き) を学習すべきである。」と明記している⁷。

先述の、日本、アメリカ、イギリスの場合に基づいて考察すると、パソコンはじめ情報機器が普及定着した現代では、日常生活で手書きの際に用いる書字スタイルは、読むための文字と書くための文字の間に齟齬を起こさない、すなわち活字に近い形 (=Printed writing (Manuscript writing) や楷書) であることが世界の国々で一般的に成されていると捉えていた。しかし、小林 (2019)¹での考察で認識は一変した。現在フランスでは、『2002 年初等学校学習指導要領』⁸に示される「小学校では、確実に読みやすい草書体 (小文字と大文字) を身につけなければならない。」を受け、書字学習の最初の段階において、Printed writing は学習せず Cursive writing を学習の導入とする。文字学習入門期に、Cursive writing の先習後 Printed writing に移行するといった学習を展開しているのである。フランスの場合、保育学校の 5 歳児から小学校就学後の児童向け学習テキストでは、一貫して Cursive writing 先習の学習形態をとっている。

このようなフランスでの実状は、既述した筆者の推測を覆すものであった。

本稿冒頭に掲げた『Spelling, Handwriting and Dyslexia』は、「現在、文字学習入門期の最初に用いる書字スタイルは Cursive writing である」とのフランスの実状が少なくともイギリスでも同様であることを裏づけるものとなった。同書は、Cursive writing から導入する理由も明記している。

本論考では、まず、『Spelling, Handwriting and Dyslexia』に基づき、イギリスにおける文字学習入門期に先習する書字スタイルに関しての実情と背景を、「Literacy Hour」の在り方をふまえながら考察する。

3. 「Literacy Hour」の概観と特徴

『Spelling, Handwriting and Dyslexia』には、「Literacy Hour」に関する記述が頻出する。現在のイギリスの教育において、英語 (= 国語) 力の担保及び育成と向上には、「Literacy Hour」の概念を理解し、かつ実践することが必至の課題として求めら

れると推察する。本章では、先行研究及び『Spelling, Handwriting and Dyslexia』に則り、「Literacy Hour」の概観と特徴をまとめる。まず、「3. 1」「3. 2」において「Literacy Hour」の概念等に関する記述を先行研究から引用し、当該箇所を簡条書きにて抜粋する。同様に、本論考における考察対象文献からの引用 (筆者訳によって表記) を「3. 3」にて抜粋掲載する。なお、「Literacy Hour」の概念理解に必要と考える記述は、Handwriting や書くことの領域のみに特化せず、英語 (= 国語) 教育の内容全般に関する点をお断りしておく。

3. 1 Literacy Hour の概観 1—松川他 (2003)⁹ から—

- 現在イングランドでは、リテラシー (読み書きの基礎能力)、ニューメラシー (計算の基礎能力) の向上を図るための教育政策が推進されている。それぞれ、The National Literacy Strategy (以下「NLS」)、The National Numeracy Strategy と呼ばれる。
- 中でも、DfEE (Department of Education and Employment、教育雇用省、1998) 刊行、The National Literacy Strategy Framework for teaching (以下「NLFT」) の影響は大きく、その中で提案されているリテラシー・アワー (1 時間の学習指導過程) は多くの公立小学校で導入され、NLS を象徴する存在として位置づけられる。
- NLFT は、DfES (Department for Education and Skills、教育技能省) 推奨のプログラムであり法的拘束力はないが、NC (DfEE、1999) の English をふまえたものである。NC は、1988 年の Education Reform Act (教育改革法) によって制定され、その後 1995 年及び 1999 年の 2 回の改訂を経て現在に至っている。NLFT は、1995 年版 NC を、また 1999 年版 NC は、NLFT を視野に入れて作成されており、NLFT と NC は緊密な関係にある。
- 現行の NC は、児童生徒は何を教えられるべきかという学習プログラム (the programme of study) と達成目標 (the attainment targets) から構成される。学習プログラムの実施にあたっては、原則として各学校の裁量に委ねられるが、英語科に関しては、リテラシー・アワーを導入することを DfES は推奨している。学習プログラムは「話すこと・聞くこと (speaking and listening)」「読むこと (reading)」「書くこと (writing)」の領域別に掲げられる。各領域は、指導目標を示した「知識・技術・理解 (knowledge・skills and understanding)」と教室で与えるべき幅広い教材や活動を示した「学習の広がり (breadth of study)」からなる。「手書きの文字と書き表し方」は、KSI における「知識・技術・理解」の大きな項目の一つ「書くこと」の中に位置づけられる。
- NLFT は、書き言葉を 3 つの「系」(単語・文・文章) に分割している。単語レベルでは、フォニック

ス、つづり、語彙に関する領域が取り扱われる、指導目標の見出し語として、①音韻の知識、フォニックス、つづり (Phonological awareness・phonics and spelling) ②単語の認識、文字の知識、つづり (Word recognition, graphic knowledge and spelling) ③語彙の拡充 (Vocabulary extension) ④手書きの文字 (Handwriting) の4項目が立てられている。

- ④手書きの文字 (Handwriting) では、YR 及び Y1T1 の書き易く効率のよい鉛筆の持ち方に始まり、YR 及び KS1 を通して正しく形の整った文字の書き方が指導される。Y1 では、後につなぎ文字で書くことを考慮し、書き順や文字方向についても指導される。これを受ける形で、Y2 では文字のつなぎ方 (例、Y2T2) が具体的に示される。
- UK では、1996 年の時点で識字率の向上が重要な国家的課題として受け止められていた。また、9 歳と 14 歳の児童を対象としたリーディング・スキルの調査で、低得点者の割合が他国に比べて高かった。このような国内状況や国際比較の結果等がリテラシーに着目するバックグラウンドにはあった。
- リテラシー・アワーは、NLFT の理念を具現化したものであり、現在のイングランドの公立小学校における英語科教育の現状と課題を把握する上で重要な鍵となるものである。
- リテラシー・アワーは、NLFT の理念を具現化した、「リテラシー (英語科) の 1 時間 (60 分) の授業」のことである。この時間は、児童一人一人のリテラシーの向上を図ることを主眼としている。
- リテラシー・アワーは、日本の伝統的な指導過程である、導入・展開・整理と重なるところがあり、学習形態と時間配分を明記している。
- リテラシー・アワーは、週 5 時間設定する。
- リテラシー・アワーは、「読み書きに特化させた」英語科の授業のことであり、NLS 及び NLFT を象徴する用語となっている。
- リテラシー・アワーで用いるテキストやワークシートなど、教材選定・開発に関しては教師に委ねられているが、多くの教師は市販のものや DfES 発行の教材集に依存しているのが現状である。
- リテラシー・アワーを担当する教師には、確かに豊かな英語力と児童の能力に応じた学習材の開発力が求められる。国情の違いはあるが、言葉の教育という観点からリテラシー・アワーを捉えたとき、それは、日本の国語科のカリキュラムや教員養成カリキュラムの在り方を開発していく上で、長短含めて多くの示唆を与えてくれる。

3.2 Literacy Hour の概観 2

—丹生(2007)¹⁰(A) 松山(2004)¹¹(B) から—

A「読み書き能力に関する全国共通指導方略」(The

National Literacy Strategy: 以下「方略」) は、1997 年に、イングランドにおいて、現在の労働党政府により発表され、1998 年 1 学期 (9 月) より施行された小学校英語教育改革プログラムである。

A「方略」によって、イングランドのほとんどの公立小学校「英語」という教科は、リテラシー・アワー (Literacy Hour) と改められた。

A「リテラシー・アワーの構造」

60 分間の授業時間を四部 (15 分・15 分・20 分・10 分) に分割し、それぞれの時間の教授・学習の形態 (一斉形態か、個別・グループ形態か) や内容領域 (語レベルか、文レベルか、文章レベルか) を指定したもの。

Aこの教育改革プログラムはイングランドに向けた施策である。ウェールズはほぼこれに倣い、スコットランドと北アイルランドは一線を画している。

B主な基本的特徴を掲げる。①基礎学力の底上げを具体的な数値目標として明示し、教育重視を鮮明に打ち出した、政府主導型の国際競争力強化を見据えたリテラシー教育。②入門期から第 9 学年まで (日本の中学 2 年相当)、numeracy と対をなして、全カリキュラムの基底として一貫してリテラシーを取り立てる基礎・基本の徹底。③1 日 1 時間のリテラシーの時間 (Literacy Hour) の常設と体系的指導を強く奨励し、指導と学習双方の底上げをきわめて具体的な到達指針によって明確化。④指導事例・学習補助資料を提供し、実践支援の徹底を図る「指針」推進環境の充実。⑤語・文・テキストの 3 レベルからなる到達指針として、義務教育において求められるリテラシーを具現化し、指導、学習、評価の基軸として機能。⑥カリキュラム準拠全国到達度評価テスト (7 歳、11 歳、14 歳) やパイロット校実態調査の結果と連動した実践的補強プログラムの随時提供というフィードバックシステムの要として機能。

3.3 『Spelling, Handwriting and Dyslexia』における Literacy Hour と Handwriting

続いて、『Spelling, Handwriting and Dyslexia』では「Literacy Hour」とその背景に関しどのように記しているか。同書「Chapter 2 Handwriting」(pp.32-64) での「Literacy Hour」に関する記述を全て抽出する (筆者訳、下線部: 筆者着目箇所)。

○授業見学からわかることは、授業の 80% までは Writing に時間が割かれる。大学では、ほとんどの学生は講義中に筆記でメモを取り、試験では長時間の筆記が要求される。

○1989 年に Handwriting の到達目標が、イングランドとウェールズで最初に明確に規定された National Curriculum に入れられた。1994 年には Spelling と

Handwriting の目標は一つにまとめられた。1998 年までに、Her Majesty's Chief Inspector (国家主席調査官) の年次報告書 (HMCI) では、識字教育の最も大きな弱点は Writing であるとして、学校、識字コンサルタント、そして関係機関が最優先して取り組まなければならないことであるとしている。しかし、同年に出版された国家識字戦略 (NLS) (DfEE 1998) で最も強調しているのは Reading である。事実、Penmanship についてはほとんど記述がなかった。すなわち、学校がその自らのポリシーを決めることができる。

- Handwriting に関し HMI (政府の学校視察官たち) は書く内容により関心があるが、Handwriting は作文の能力を伸ばすのに不可欠であろう。
- 2001 年 5 月、NLS は Developing Early Writing (初期における筆記習得) に関して Foundation Year (※4～5 歳 (筆者注)) や Key Stage1 (※5～7 歳 (筆者注)) の担当教師に向けたガイドラインを出版した。それは、学校が好ましい Handwriting スタイルを独自に選ぶことを認めた。
[中略] そこでは、学校が選ぶスタイルは、後になって筆記体につなげることができることのみを前提にしている。「Literacy Hour 以外に一日 15 分をその技能の練習に費やし、筆記体はできるだけ早く取り入れるべき」と助言している。
- 2005 年までには NLS は完全に成功してはいないことが明らかになった。83% の子供たちが Reading では level 4 に到達しているが、Writing の基準に到達したのは 63% だけであった。
- NLS の究極の目標は、生徒たちが読み書きのできる社会の一員となることである。
- Handwriting のスピードと滑らかさを伸ばすことは、もし作文の技術を上達させたいならば、小学校、中学校の両教師にとって大変重要な目標となる。
- 大学生でさえ手書きの場合 Handwriting の問題が見られる。卒業前の試験時でも素速い筆記体を書けない者が多い。よく見られる問題は、poorly formed (形が悪い)、rounded hand (丸文字)、half print and half joined script (活字体と筆記体の混在) である。これらの特徴を持った文字を書く場合、筆記体で書く場合より時間がかかるとの欠点がある。Stainthorp (1990) は、大学における彼女の教育学専攻の学生の 20% は流暢な筆記体で書くことができなかったことを明らかにしている。さらに、彼らの半分は、文字を連結すること自体全くできなかった。彼らは NLS で教師になるのだ。(※生徒に読み書きを教える立場になる学生が満足に書けないことを述べている (筆者注))
- Handwriting は 1950 年代から無視されてきたので、'Cinderella skill' と言われてきた。しかしなが

ら、学校での教育ポリシーに、Handwriting は作文の力を伸ばすために加える必要がある。

同書でのこれらの記述から、イギリスでは、「Literacy Hour」の在り方に則りながら、Handwriting と作文指導 (作文の力を育成すること) とを関連づける重要性を説き、Handwriting 及びその教育において速書性の育成を重視している実情が確認できる。

4. 『Spelling, Handwriting and Dyslexia』に基づく Cursive writing 先習の実態とその理由

前章に続き、本章では、「3. 3」と当該書「Chapter 2」において、イギリスでの Cursive writing 先習に関わる実態と、その理由に関して記述された箇所を全て抽出する。(筆者注。下線部 (= 着目箇所) と強調文字 (= 着目箇所かつ筆記体もしくは活字体に関する記述) は筆者による。抽出部には一部「3. 3」との重複がある。)

- 2001 年 5 月、NLS は、Developing Early Writing (初期における筆記習得) に関して Foundation Year (※4～5 歳 (筆者注)) や Key Stage1 (※5～7 歳 (筆者注)) の担当教師に向けたガイドラインを出版した。それは、学校が好ましい Handwriting スタイルを独自に選ぶことを認めた。[中略] 学校が選ぶスタイルは、後になって筆記体につなげることができることのみを前提にしている。「Literacy Hour」以外に一日 15 分をその技能の練習に費やし、筆記体はできるだけ早く取り入れるべきだと助言している。50 年間以上、infant school (小学校 2 年生まで) は子供たちが学ぶ Handwriting のスタイルを決めてきたが、イングランドでは、これは主に print script (活字体) で、それは子供が学ぶには学びやすいと考えられた。しかしながら、研究によれば、このスタイル (print) はかなり多くの生徒には問題である。
- Handwriting は教えられる必要のある運動神経による活動である。それは歩行のように自然に身につく技能ではない。運動神経による記憶がそれぞれの文字を書く方向や形をコントロールする。そして、それゆえ、もしも連続的な筆記体のスタイルはできる限り早期に確立されれば、自動的な自然な動きを獲得できることの助けとなる。
- 子供向けの物語や読みの学習では print script であるため、まず読みの学習では活字体を教え、目標が到達できればできるだけ早く筆記体を教えるように促された。これは 8 歳の時のことだ。しかし、活字体が筆記体を習う前に習得しやすいということに何の証拠もない。実際、大多数の国では、最初から筆記体が教えられる。さらに、フランスの教育では、

Handwriting を教えることはリーディングやスペリングよりも重視される (Thomas 1998)。

- 読み(読解)を教えるイギリスの教師は、活字体をより単純化したスタイル (ball and stick= 円と棒) のような形を採用した。しかし、これは、後の筆記体を書く際に役立つ ligature (連結部) を持った文字を主張する、Morison と Richardson によって異論が唱えられた。(=Handwriting の専門家によって批判された (筆者注))
- NLS の導入以降でも、活字体は読み(読解)の授業では主に使用されたが、筆記体の手前の連結文字がこれに加えられた。Year1 や Year2 でもこれが筆記体と一緒に使用された。2種類の筆記スタイルを持つことは多くの生徒は難しいと感じた。
- 活字体を使う生徒は、きれいな筆記に見えるのでそれを使うことを好むことが多い。活字体(連結を伴う文字の場合)は、運動機能の調整に問題のある子供には難しい。一旦小脳が活字体を学ぶと、筆記体を学ぶのは全く新しい(手の)運動の習得である。活字体は筆記体への橋渡しにはならず、連結文字も問題を抱える生徒への答えにはならない。
- NLS が早期にやさしい筆記体を学習するよう推奨しているにもかかわらず、依然として小学校では活字体が確立している。
- 筆記体は
 - ページ内での左から右への単語の動きを助ける。
 - 文字の逆転、逆方向への動きを止める。
 - 読みやすさを確保しつつ、筆記における流暢さによって速い筆記スピードにつながる。
 - 同じ時間でもっと多く書くことが可能になる。
 - GCSE の試験や大学入試試験 (A Level) でスピードと流暢さから結果に違いを生む。
 - 読みやすさを促進する。
- 最も難しいのは、幼児期の活字体を 7、8 歳の時に

筆記体に変えさせることだ。教科の勉強に充てべき時間を筆記練習に充てなければならないことになる。特に、筆記に問題を抱える者には困難なことだ。また、活字体できれいに書けないものは、筆記体に進むことを許さないこともよくある。

- 一度筆記技能とスタイルが確立するとその変更は難しい。従って、生徒は筆記スタイルの変更が価値あることだと納得しなければ努力しようとしない。
- 子供たちは新しいスタイルの習得に積極的でなければならぬ。活字体は筆記体が確立した後に教える方がよい。

5. イギリスで Cursive writing 先習を推奨する理由

イギリスにおいて、活字が広く普及した社会からの要請に応え、読むための文字と書くための文字の双方を学習する負担をなくすために、古からの定番であった Cursive writing 先習の形を Manuscript writing 先習の形へ変更したものの、結局は Cursive writing 先習の形に戻したとの実情に至った理由は何か。

同書の内容から、最たる理由には書字活動における書字速度の重視に伴い Cursive writing が重要視された点が挙げられる。あわせて、Handwriting と Writing や作文指導 (作文の力を育成すること) との関連の重要性に基づき、速く書ける能力の育成が必至とされる点も挙げられる。また、Spelling に関して Cursive writing を学習することの有用性や、「教えられる必要のある運動神経による記憶」への負担を軽減する意図も読みとれる。端的に言えば、同書にまとめられた筆記体の特徴、すなわち、筆記体は、「ページ内での左から右への単語の動きを助ける」「文字の逆転、逆方向への動きを止める」「読みやすさを確保しつつ、筆記における流暢さによって速い筆記スピード

表 1 『The National Curriculum in England』(2013) に示される Handwriting の学習内容における書字スタイルに関する概略
(※小林比出代 (2020)「左利き者の書字教育に関する研究」、広島大学大学院教育学研究科 (博士課程後期) 学位論文, pp.142-143 から関係箇所のみ抜粋。強調文字=筆者着目箇所)

Key Stage		法的に規定されている学習内容	注記 (法的要件ではない学習内容)
Key Stage 1	第 2 学年	○ 続け書きに必要な斜めや水平な線を使い始め、どの文字を連続させるかさせないかを理解する。	○ 確実に正確な字形で書けるようになったら、連続した書き方 (続け書き) を学習すべきである。
Lower Key Stage 2	第 3-4 学年	○ 続け書きに必要な斜めや水平な線を使い、どの文字を連続させるかさせないかを理解する。	○ 各々の Writing を通して、文字を連続して書くこと (続け書き) ができるようになる。 ○ 自分が言いたいことを書きとめられるように、自然な運筆 (流暢さ) を高めるねらいとして、Handwriting は引き続き指導されるべきである。この学習は、作文と Spelling の学習をサポートする。
Upper Key Stage 2	第 5-6 学年	○ 読みやすく、自然な運筆で、速度を上げて書ける。 ○ 個々人の書字スタイルの一環として、目的や必要に応じ、続け書きも含めて、用いる文字の形を選択できる。	○ Handwriting の練習を続けて、書字速度を上げるように促す必要がある。自分の言いたいことを書きとめるのに時間を要しないようになる。 ○ 例えば、図表やデータのラベル、e メールアドレスの記述、フォームへの記入にあたっての数字や大文字は続け書きをしないことを学習すべきである。

出典 : Scholastic (2013). *The National Curriculum in England*. London, UK: Ashford Colour Press. pp.13-14. pp.16-40. (筆者訳)

につながる」「同じ時間でもっと多く書くことが可能になる」「GCSEの試験や大学入試試験(A Level)でスピードと流暢さから結果に違いを生む」「読みやすさを促進する」ことが全てそのまま Cursive writing 先習の理由になる。

しかし、現行のナショナルカリキュラムにおける記述やナショナルカリキュラムに準拠し実際にイギリスで使用される Handwriting のテキスト内容と食い違いが存するのも事実である。『English in the National Curriculum』(1995) に示された Handwriting の教育目標の Key Stage 1 (5～7歳) には「joined (連続している)」が掲げられるが、『The National Curriculum in England』(2013) に示された Writing 学習における Handwriting の学習内容では、Lower Key Stage 2 (第3-4学年) で「文字を連続して書くこと(続け書き)が標準的にできなければいけない」と規定される。「表1」は同書提示の Handwriting の学習内容である。

6. 展望と課題

このように、ナショナルカリキュラムにおいては、Key Stage 1 の第1学年で Cursive writing の学習を求めている。また、現行のナショナルカリキュラムに準拠した Handwriting のテキストでは、Key Stage 1 (Ages 5-7) は文字学習を Printed writing から始めてこの書字スタイルの学習を深めることを前提とし、Key Stage 2 (Ages 7-11) で Joined up を学習する。

この現実と当該文献での記述との異なりに関して、実地での調査を視野に入れて検証考察する必要がある。これからの研究課題として向かい合いたい。さらには、松川他(2003)⁹に記述されるように、「Literacy Hour」は、国情の違いはあれど、日本の国語科のカリキュラムや教員養成カリキュラムの在り方を開発する上で、長短含めて多くの示唆を与えられ考えられる。ひいては、特に文字学習入門期に先習する書字スタイルに関しても、イギリスでの基礎学力の担保、「読むこと」「書くこと」の能力の育成との観点から Cursive writing 先習の形を提唱する姿勢には、日本での行書学習の在り方を検討するための肝要な要素が内在すると推察できる。「連続的な筆記体のスタイルはできる限り早期に確立されれば、自動的な自然な動きを獲得できることの助けとなる。」「一旦小脳が活字体を学ぶと、筆記体を学ぶのは全く新しい(手の)運動の習得である。活字体は筆記体への橋渡しにはならず、連結文字も問題を抱える生徒への答えにはならない。」とのイギリスにおける Cursive writing 先習を推奨する理由は、「現在日本の小学校学習指導要領において第5学年及び第6学年の学習内容とする『点画のつながり』は低学年で扱うべきである」との大き

な問題提起の根拠になり得る。イギリスでの文字学習入門期に先習する書字スタイルに関しての在り方を日本の場合に擬えて検討する点もあわせ、これからの研究課題と考えたい。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 JP21K02488 の助成を受けたものである。

『Spelling, Handwriting and Dyslexia: Overcoming barriers to learning』の和訳とその内容解釈に関しまして、長田哲文先生と Sue Fraser 先生から御指導を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

注

- 1 イギリスでの「Cursive」の語に関する説明を、小林比出代(2019)「現代フランスの書字教育に関する基礎的研究—書字教育の目標と文字学習入門期に先習する書字スタイルに着目して—」『書写書道教育研究』第33号, p.21. から抜粋する。「Dr Rosemary Sassoon の記述によると、イギリスでは、「1988年教育改革法」によって制度化されたナショナルカリキュラムにて、1989年に「Cursive」の語が「Joined-up」の語に変更された。本論考(=小林(2019))では長田哲文氏の、「「Cursive」を「筆記体」と和訳するならば、「Joined-up」には他の用語(日本語)が必要となる。「Cursive」は完全な筆記体を意味するのに対して、「Joined-up」は活字体(Printed)をつなげたものと考えられる。よって、「Joined-up」は「連結体」と和訳するのが適切と考える」との見解を支持する。」ただし、本論考においては、用語の混乱を避けるため、「Cursive」の語に統一して使用する。
- 2 小林(2019), 前掲書, pp.21-30.
- 3 小林(2001), 前掲書, p.40.
- 4 小林比出代(2001)「日米の書字教育に関する比較研究—20世紀における活字及び印字機器の普及と書字教育—」『青山杉雨記念賞 第四回 学術奨励論文選』, p.36.
- 5 小林比出代(2017)「現代イギリスにおける Handwriting の教育目標及び教材に関する考察—「1988年教育改革法」制定当時のナショナルカリキュラムに準拠した在り方との比較—」『書写書道教育研究』第32号, p.24.
- 6 小林比出代(1998)「教育目標から見た英・米国の Handwriting の教育と日本の書写教育」『書写書道教育研究』第12号, p.22.
- 7 小林(2017), 前掲書, p.25.
- 8 諸外国の教科書に関する調査研究委員会編(2007)『フランスの教科書制度』, 教科書研究センター, pp.28-51.
- 9 松川利広, 佐伯知美, 土屋まどか(2003)「イングランドにおけるリテラシー・アワーに関する基礎的研究—Reception Year と Key Stage 1 を通して—」『教育実践総合センター研究紀要』12巻, pp.109-124.
- 10 丹生裕一(2007)「イングランド National Literacy Strategy の効果的な実践に関する一考察」『国語科教育』第61集, pp.35-42.
- 11 松山雅子(2004)「“The National Literacy Strategy”の基礎研究—文学テキストを軸としたリテラシー指導法略指針を中心に—」『全国大学国語教育学会国語科教育研究: 大会研究発表要旨集』107, pp.125-128.